

參考太平記

六

和書
一〇〇五一號

和書門			
一〇	二	五	一
四	五	八	一
冊	架	函	號類

內閣文庫			
一〇	五	一	和書
六	四	一	函架
七	一	三	冊架

內閣文庫		
番號	和	10051
冊數	41	(7)
函號	167	74



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



神

參考太平記卷第六百錄

内一二六一〇號

民部卿三位局御夢想事

楠出張天王寺附隅田高橋敗北并宇都宮事

正成披見天王寺未來記事

大塔宮賜赤松入道圓心令旨事

關東大勢上洛附發向吉野赤坂金剛山事

赤坂城軍附人見本間拔懸并平野入道降參事

文

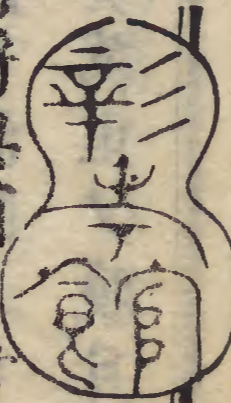
文庫

卷六目

淡路島... 大津島... 河内... 今... 太平記卷第六

考

太平記卷第六 内一二六一〇號



大正

常陽水戸府

魯齋今井弘濟將興甫 考訂

著軒内藤貞顯仲微甫 重校

民部卿三位局御夢想事

段首數行過盛葉更
樂一節西源院本等

南宮

去年九月二笠置城破レテ先帝隱岐國へ遷サレ

サセ給ヒレ後ハ百司ノ舊臣悲ヲ抱テ所々ニ籠
居レ三千ノ宮女涙ヲ流シテ面々ニ伏沈ニ給フ
有様誠ニ浮世ノ中人習テ云ナカラ殊更哀ニ聞

太平記

卷六

三

へしハ。民部卿三位殿御局ニテ留タリ。其ヲ如何
ト申ニ。先朝ノ御寵愛淺カラサル上。大塔宮ノ御
母堂ニテ渡ラセ給ヒシカハ。傍ヘノ女御后ハ。花
ノ側ノ深山木ノ色香モナキカ如クナリ。シカル
ヲ世中靜ナラサリシ後ハ。萬引替タル九重ノ内
ノ御住居モ定マラス。荒ノ三増ル浪ノ上ニ。船流
シタル海士ノ心地シテ。寄方モナキ御思ノ上ニ
打添テ。君西海ノ歸ラヌ波ニ浮沈ニ。淡隙ナキ御
袖ノ氣色ト承シカハ。空シク思ヲ萬里ノ曉月ニ

傾ケ。宮ハ又南山ノ道ナキ雲ニ蹈迷ハセ給ヒテ。
アコカレタル御住居ト聞ユレト。書ヲ三春ノ暮
ノ鴈ニ託カタシ。彼ト云此ト云一方ナラヌ御歎
ニ。青絲ノ髮疎ニシテ。何ノ間ニ老ハ來ヌラト
怪レシ。紅玉ノ脣消テ。今日ヲ限ノ命トモカナト
思召ケル。御悲ノ遣方ナサニ。年來ノ御祈ノ師ト
テ。御誦經御撫物ナト奉リケル。北野ノ社僧ノ房
ニオハシメシテ。一七日參籠ノ御志アル由ヲ仰
ラレケレハ。此折節武家ノ聞ヘモ。憚ナキニハア

ラ子トモ。日来ノ御恩モ重ク。今程ノ御有様モ御
痛ハレケレハ。情ナクハ如何ト思ヒテ。拜殿ノ傍
ニ。僅ナル一間ヲ拵テ。尋常ノ青女房ナトノ。參籠
シタル由ニテ置奉リケリ。哀古ナラハ。錦帳ニ粧
ヲ籠紗窓ニ艶ヲ閉テ。左右ノ侍女其數ヲ知ス。ア
タリヲ輝シテ。イツキカシツキ奉ルヘキニ。何レ
カ引替タル御忍ノ物籠リナレハ。都迄ケレ共。事
問カハス人モナシ。只一夜ノ松ノ嵐ニ御夢ヲ覺
サレ。主忘レヌ梅カ香ニ。昔ノ春ヲ思召出スニモ。

昌泰ノ年ノ末ニ。荒人神ト成セ給ヒシ。菅丞相之
事。詳出第

十二卷 心ツクシノ御放宿マテモ。今ハ君ノ御思
ヒニ擬ヘ。又ハ御身ノ歎ニ思召知レタル。哀ノ色
ノ數々ニ。御念誦ヲ暫ク止ラレテ。御涙ノ内ニカ
クハカリニ。哀ナクシテ。心ツクシノ古ノ夕ヒ
入忘スハ神モ哀ト思ヒシレ。心ツクシノ古ノ夕ヒ
ト遊ハシテ。少御テト口ニ有ケル。其夜ノ御夢ニ。
衣冠正シクシタル老翁ノ。年八十有餘ナルカ。左
ノ手ニ梅花ヲ一枝持。右ノ手ニ鳩ノ杖ヲツキ。最

苦レ午ナル體ニテ御局ノ臥給ヒタル枕ノ邊ニ
 立給ヘリ。御夢心地ニ思召ケルハ。篠ノ小篠ノ一
 節モ問ヘキ人モ覺ヌ。都ノ外ノ蓬生ニ怪レヤ誰
 人ノ道踏迷ヘルヤスラヒソヤト。御尋有ケレハ。
 此老翁ヨニ哀ナル氣色ニテ云出セル詞ハナク
 テ持タル梅ノ花ヲ御前ニ指置テ立歸ケリ。不思
 議ヤト思召テ御覽スレハ。一首ノ歌ヲ短冊ニカ
 ケリ

廻リキテ遂ニスムキ月影ノレハレ陰ルヲ何嘆クラン

御夢覺テ歌ノ心ヲ案レ給ヲニ。君遂ニ還幸成テ
 雲ノ上ニ住セ給ヘキ瑞夢ナリト。憑敷思召ケリ。
 誠ニ彼聖廟ト申奉ルハ。大慈大悲ノ本地。天滿天
 神ノ垂跡ニテ渡ラセ給ヘハ。一度歩ヲ運フ人ニ
 世ノ悉地ヲ成就シ。僅ニ御名ヲ唱ル輩萬事ノ所
 願ヲ満足ス。況ヤ千行萬行ノ紅淚ヲ滴盡シテ七
 日七夜ノ丹誠ヲ致サセ給ヘハ。懇誠暗ニ通シテ。
 感應忽ニ告アリ。世既ニ澆季ニ及トイヘトモ。信
 心誠アル時ハ。靈鑑新ナリト。彌憑敷ソ思召ケル

楠出張天王寺附隅田高橋敗北并宇都宮事

元弘二年三月五日天正本作元德二年二月五日左近將監時益

越後守平時敦子時政六世孫也越後守仲時兩六波羅二補セラ

レテ關東ヨリ上洛ス代々將軍執權次第及北條家譜云元德二年七月時益

上洛同年十二月仲時上洛未知孰是此三四年ハ常葉駿河守範貞

一人トシテ兩六波羅ノ成敗ヲ司テ在シカ天正本云

此三四年常葉範貞金澤貞將兩人居六波羅云云按代々將軍執權次第北條家譜六波羅北方範貞元亨元年上洛元德二年下向鎌倉南方貞將正中元年上洛元德二年下向鎌倉與本文異未知孰是

固ク辭シ申ケルニ依テトソ聞ヘニ此上西源院本不載楠

兵衛正成ハ去年赤坂城ニテ自害シテ燒死タル

真似ヲシテ落タリシヲ實ト心得テ武家ヨリ其

跡ニ湯淺孫六入道定佛ヲ孫六金澤院西源院本作四郎地頭ニ

居置タリケレハ今ハ河内國ニ於テハ殊ナル事

アラント心安ク思ヒケル處ニ同四月三日楠五

百餘騎ヲ率シテ俄ニ湯淺力城へ押寄テ息ヲモ

ツカス攻戰フ城中ニ兵糧ノ用意乏シカリケル

ニヤ湯淺力所領紀伊國阿瀬河ヨリ人夫五六百

人ニ毛利家本兵糧ヲ持セテ夜中ニ城へ入シト

スル由。楠カガ灰ニ聞テ。兵ヲ道ノ切所へ差遣シ。悉ク是ヲ奪取テ。其俵ニ物具ヲ入替テ。馬ニ負セ。人夫ニ持セテ。兵ヲ二三百人。兵士ノ様ニ出立セテ。城中へ入シトス。楠カ勢是ヲ追散サシトスル真似ヲシテ。追ツ返ツ。同士軍ヲソシタリケル。湯淺入道是ヲ見テ。我兵糧入ル兵トモ。楠カ勢ト戰フソト心得テ。城中ヨリ打テ出テ。ソ、口ナル敵ノ兵トモヲ。城中へツ引入ケル。楠カ勢トモ思ヒノ儘ニ城中ニ入スニシテ。俵ノ中ヨリ物具トモ取出

シ。ヒシヒシト堅メテ。則ナ闕聲ヲツ揚タリケル。城ノ外ノ勢同時ニ水戸ヲ破リ。塀ヲ越テ攻入ケル。間湯淺入道内外ノ敵ニ取籠ラレテ。戰へキ様モ無リケレハ。忽ニ頸ヲ伸テ降人ニ出。楠其勢ヲ并セテ七百餘騎ニテ。和泉河内兩國ヲ靡タビケテ。大勢ニ成ケレハ。五月北條家金勝院西源院十七日。先住告天王寺邊へ打テ出テ。渡部ノ橋ヨリ南ニ陣ヲ取。然ル間和泉河内ノ早馬敷シキナシ並ヲ打テ。楠已ニ京都へ攻上ル由告ケレハ。洛中ノ騷動斜ナラス。

武士東西ニ馳散テ。貴賤上下周章事窮リナレカ
 カリケレハ。兩六波羅ニハ。畿内近國ノ勢。雲霞ノ
 コトク馳聚テ。楠今ヤ攻上ルト待ケレトモ。敢テ
 其儀モナケレハ。聞ニモ似ス楠小勢ニテソ有テ
 乙。此方ヨリ押寄テ打散セトテ。隅田高橋ヲ兩六
 波羅ノ軍奉行トシテ。四十八箇所ノ篝火并ニ在京
 人。畿内近國ノ勢ヲ合セテ。天王寺へ指向ラル。其
 勢都合五千餘騎諸異本。及。神明鏡。作七千。今
 出川家本同。本文。下。做之。同二
 十日北條家金勝院。西源
 院本。作四月二十日。京都ヲ立テ。尼崎神崎柱

松ノ邊ニ陣ヲ取テ。遠篝火ヲ燒テ。其夜ヲ遲シト待
 明ス。楠是ヲ聞テ。二千餘騎ヲ三手ニ分。宗徒ノ勢
 ヲハ。住吉天主寺ニ隱シテ。僅三百騎許ヲ渡部橋
 ノ南ニ控ヘサセ。大篝火二三箇所ニ燒セテ相向ヘ
 川。是ハ態敵ニ橋ヲ渡サセテ。水ノ深ニ追ハ入。
 雌雄ヲ一時ニ決セシカ為ナリ。去程ニ明レハ五
 月北條家。金勝院。西源院本。又作四月。今川
 家。南都本。此上作五月。今作四月。相齒齧。二十一
 日ニ。六波羅ノ勢五千餘騎五千。西源院本。前同本
 文。而自此下。皆作七千。
 相齒齧。所々ノ陣ヲ一ニ合。渡部橋ニテ打臨テ。河向

ニ控へタル敵ノ勢ヲ見渡セハ。僅ニ三百騎ニハ
過ス。剩ヤセタル馬ニ。繩手綱懸タル體ノ武者十
モナリ。隅田高橋是ヲ見テ。サレハコソ和泉河内
ノ勢ノ分際サコソ有ラメト思フニ合テ。ハカハ
カレキ敵ハ一人モ無リケリ。此奴原ヲ一々ニ召
捕テ。六條河原ニ切懸テ。六波羅殿ノ御感ニ預ラ
ニト云儘ニ。隅田高橋。人交モセス橋ヨリ下テ一
文字ニソ渡レケル。五千餘騎ノ兵トモ是ヲ見テ。
我先ニト馬ヲ進メテ。或ハ橋ノ上ヲ歩マセ。或ハ

河瀬ヲ渡レテ。向ノ岸ニ懸上ル。楠カ勢是ヲ見テ。
遠矢少々射捨テ。一戰モセス。天王寺ノ方へ引退。
六波羅ノ勢是ヲ見テ勝ニ乘リ。人馬ノ息ヲモ繼
也ス。天王寺ノ北ノ在家ニテ揉ニ揉テソ追タリ
ケル。楠思フ程敵ノ人馬ヲ疲ラカレテ。二千騎ヲ
三手ニ分テ。一手ハ天王寺ノ東ヨリ。敵ヲテ手ニ
請テ懸出。一手ハ西門ノ石ノ鳥居ヨリ。魚鱗懸ニ
懸出。一手ハ住吉ノ松陰ヨリ懸出テ。鶴翼ニ立テ
開合ス。六波羅ノ勢ヲ見合スレハ。對揚スヘキ迄

モナキ大勢ナリケレトモ陣ノ張様レト口ニテ。
却テ小勢ニ圍レヌヘクソ見ヘタリケル。隅田高
橋是ヲ見テ。敵後ニ大勢ヲ隱レテタハカリケル
以。此邊ハ馬ノ足立惡レテ叶ハレ。廣ニハ敵ヲ才
ヒキ出シ。勢ノ分際ヲ見計フテ。懸合懸合勝負ヲ
決セヨト下知レケレハ。五千餘騎ノ兵トモ。敵ニ
ウレロヲ切ラレヌ先ニト。渡部ノ橋ヲ指テ引退。
楠力勢是ニ利ヲ得テ。三方ヨリ勝鬨ヲ作テ追懸
ル。橋近ク成ケレハ。隅田高橋是ヲ見テ。敵ハ大勢

ニテハ無リケルソ。此ニテ返合セスハ。大河後ニ
在テ惡カリヌヘシ。返セヤ兵共ト。馬ノ足ヲ立直
立直。下知レケレトモ。大勢ノ引立タル事ナレハ。
一返シモ返サス。只我先ニト橋ノ危ヲモイハス。
馳集リケル間。人馬トモニ推落サレテ。水ニ溺ル
ル者數ヲ知ス。或ハ洲瀬ヲモ知ス渡レ懸リテ。死
ヌル者モアリ。或ハ岸ヨリ馬ヲ馳倒レテ其儘討
ル。者モアリ。只馬物具ヲ脱捨テ。逃延ントスル
者ハアレトモ。返合テ戰ハントスル者ハ無リケ

リ。レカレハ五千餘騎ノ兵トモ。殘少ニ打成サレ
テ。匍々京ヘソ上リケル。其翌日何者カ仕タリケ
ン。六條河原ニ高札ヲ立テ。一首ノ歌ヲソ書タリ
ケル

渡部ノ水イカハカリ早ケレハ。高橋落テ隅田流ルニ

今川家本云。隅田流ル。云云

京童ノ癖ナレハ。此落書ヲ歌ニ作りテ歌ヒ。或ハ
語傳テ笑ケル間。隅田高橋面目ヲ失ヒ。且夕ハ出
仕ヲ止メ。虚病シテソ居タリケル。雨六波羅是ヲ

聞テ。安カラヌ事ニ思ハレケレハ。重テ寄セント

議セラレケリ。其比京都餘ニ無勢ナリトテ。關東

ヨリ上セラレタル。宇都宮治部大輔ヲ呼寄大輔。天正

本作。少輔。非也。宇都宮公綱。初名。高綱。參河守貞綱子。法名理蓮。評定有ケルハ毛利

家。天正本云。京都餘リニ無勢ナリトテ。關東へ勢ヲ乞レケルニ依テ。宇都宮ヲ上セラレ。云云合

戰ノ習。運ニ依テ雌雄替ル事。古ヘヨリ無ニ非ス。

然トモ今度南方ノ軍ニ負ヌル事。偏ニ將ノ謀ノ

拙キニヨリ。又士卒ノ臆病ナルカ故ナリ。天下ノ

嘲哂口ヲ塞クニ所ナシ。就中仲時罷上ニ後。重テ

卷六

御上洛ノ事ハ。凶徒若蜂起ヒハ。御向有テ靜謐候
ヘトノ為ナリ。今ノ如クハ。敗軍ノ兵ヲ驅集テ。何
度々ケテ候トモ。ハカハカシキ合戦レツトモ覺
ス候。且ハ天下ノ一大事。此時ニテ候ヘハ。御向候
テ御對治候ヘカレト宜ヒケレハ。宇都宮辭退ノ
氣色ナクシテ申サレケルハ。大軍已ニ利ヲ失テ
後。小勢ニテ罷向候ハニ事。如何ト存候ヘトモ。關
東ヲ罷出シ始ヨリ。加様ノ御大事ニ遇テ。命ヲ輕
クセン事ヲ存候キ。今ノ時分必シモ合戦ノ勝負

ヲ見ル所ニテハ候ハ予ハ。一人ニテ候トモ。先罷
向テ。一合戦仕リ。難儀ニ及候ハハ。重テ御勢ヲコ
ソ申候ハメト。誠ニ思定タル體ニ見ヘテソ歸ケ
ル。宇都宮一人武命ヲ含テ大敵ニ向ハニ事。命ヲ
惜ムヘキニアラサリケレハ。態宿所ヘモ歸ラス。
七月十九日六波羅ヨリ直ニ都ヲ出テ。天王寺ヘ
ソ下リケル。東寺邊ニテハ。主從僅十四五騎カ程
トミヘシカ。洛中ニアラユル所ノ手ノ者トモ馳
加リケル間。四塚作道ニテハ。五百餘騎ニソ成ニ

ケル路次ニ行逢者ヲハ。權門勢家ヲ云ス。乘馬ヲ
奪ヒ。人夫ヲカケ立テ通りケル間。行旅ノ往反路
ヲマケ。間里ノ民屋扉ヲ閉。其夜ハ柱松ニ陣ヲ取
テ明ルヲ待。其志一人モ生テ歸ラント思フ者ハ
無リケリ。去程ニ河内國住人和田孫三郎此由ヲ
聞テ。楠カ前ニ來テ云ケルハ。先日ノ合戰ニ負腹
ヲ立テ。京ヨリ宇都宮ヲ向候ナリ。今夜既ニ柱松
ニ著テ候カ。其勢僅六七百騎ニハ過レト聞ヘ候。
先ニ隅田高橋カ五千餘騎ニテ

五千。諸異本。及。神
明鏡。作七千。既註

上^子向テ候レシタニ。我等僅ノ小勢ニテ追散レテ
候レソカシ。其上今度ハ御方勝ニ乘テ大勢ナリ。
敵ハ機ヲ失テ小勢ナリ。宇都宮縱武勇ノ達人ナ
リトモ。何程ノ事カ候ヘキ。今夜逆寄ニシテ打散
レテ捨候ハヤト云ケルヲ。楠暫思案レテ云ケル
ハ。合戰ノ勝負必シモ大勢小勢ニ依ス。只士卒ノ
志ヲ一ツニスルトセサルトナリ。サレハ大敵ヲ見
テハ欺^子キ。小勢ヲ見テハ畏レヨト申事是ナリ。先
思案スルニ。先度ノ軍ニ。大勢打負テ引退夕跡ヘ。

宇都宮一人。小勢ニテ相向フ志。一入モ生テ歸ラ
シト思フ者ヨモ候ハシ。其上宇都宮ハ。坂東一ノ
弓矢取ナリ。紀清兩黨ノ兵。元來戰場ニ臨テ命ヲ
棄ル事。塵芥ちんがいヨリモ尚輕クス。其兵七百餘騎。志ヲ
一ツニシテ戰ヲ決セハ。當手ノ兵。縱退シ心ナク
トモ。大半ハ必討ルヘシ。天下ノ事。全今般ノ戰ニ
依ヘカラス。行宋遙やうヲ合戰ニ。多カラス御方。初度
ノ軍ニ討レナハ。後日ノ戰ニ誰カカヲ合スヘキ。
良將ハ戰ハスシテ勝ト申事候ヘハ。正成ニ於テ

ハ。明日態此陣ヲ去テ引退キ。敵ニ一面自有様ニ
思ハセ。四五日ヲ經テ後。方々ノ峯ニ篝火かきヲ燒テ。一
蒸ムス程ナラハ。坂東武者ノ習。程ナク機疲テ。イ
ヤイヤ長居シテハ惡カリナシ。一面目アル時。イ
サヤ引返サント云ヌ者ハ候ハシ。サレハ懸ルモ
引モ抑おさニヨルトハ。加様ノ事ヲ申ナリ。夜已ニ曉あけ
天ニ及ヘリ。敵定テ今ハ近附ラシ。イザサセ給ヘ
トテ。楠天王寺ヲ立ケレハ。和田湯淺モ諸共ニ打
連テソ引タリケル。夜明ケレハ。宇都宮七百餘騎

ノ勢ニテ。天王寺へ押寄。古宇都モ利家本在家ニ
 火ヲ懸。閤聲ヲ揚タレトモ。敵ナケレハ出合ハズ。
 タハカリフスラン。此邊ハ馬ノ足立悪クシテ。道
 狭キ間。懸入敵ニ中ヲ破ラレナ。後ヲ裏ミルナト
 下知シテ。紀清兩黨馬ノ足ヲ伏テ。天王寺東西ノ
 口ヨリ懸入テ。二三度ニテ懸入懸入シケレトモ。
 敵一人モナクシテ。燒捨タル篝火ニ煙殘テ。夜ハホ
 ノホノト明ニケリ。宇都宮戰ハザル先ニ。一勝シ
 タル心地シテ。本堂ノ前ニテ馬ヨリ下リ。上宮太

子ヲ

聖德太子也。既註于前。

伏拜

三奉リ

是偏ニ武カノ致ス

所ニ非ス。只併神明佛陀ノ擁護ニ係レリト。信心
 ヲ傾ケ。歡喜ノ思ヒヲ成セリ。頓テ京都へ早馬ヲ
 立テ。天王寺ノ敵ヲハ。即時ニ追落シ候ヌト申タ
 リケレハ。兩六波羅ヲ始トシテ。御内外様ノ諸軍
 勢ニ至マテ。宇都宮カ今度ノ舉動拔群ナリト。褒
 ヌ人モナカリケリ。宇都宮天王寺ノ敵ヲ。輒ク追
 散シタル心地ニテ。一面目ハ有體ナレトモ。驍テ
 續テ敵ノ陣へ攻入ニ事モ無勢ナレハ叶ハス。又

誠ノ軍一度モセスレテ引返サン事モサス力ナ
 レハ進退谷タル處ニ四五日ヲ經テ後和田楠和
 泉河内ノ野伏トモヲ四五千人今川家本作五六
 萬人恐非也北條
家南都天正本作五六千人金 驅集テ然ヘキ兵ニ
勝院西源院本作五六百人 三百騎差副天王寺邊ニ遠篝火ヲソ燒セケルス
 ハヤ敵コソ打出タレト騷動シテ深行儘ニ是ヲ
 見レハ秋篠ヤ外山ノ里生駒嶽ニ見ユル火ハ晴
 タル夜ノ星ヨリモ繁ク藻鹽草志城津浦住吉難
 波ノ里ニ燒篝ハ漁舟ニ燃ス漁火ノ波ヲ燒カト

怪シマル總テ大和河内紀伊國ニ毛利家天正本
載和泉西源院

本不載 ありトアル所ノ山々浦々ニ篝火ヲ燒又所
紀伊

ハ無リケリ其勢幾萬騎アラント推量レテ駭シ
 如此スル事兩三夜ニ及ヒ次第ニ相近ツケハ彌
 東西南北四維上下ニ充滿シテ闇夜ニ晝ヲ易タ
 リ宇都宮是ヲ見テ敵寄来ラハ一軍シテ雌雄ヲ
 一時ニ決セント志シテ馬ノ鞍ヲモ息メス鎧ソ
 上帶ヲモ解ス待懸タレトモ軍ハ無シテ敵ノ取
 廻ス勢ニ勇氣疲レ武力怠テ哀引退カハヤト思

卷六
 十一

フ心著ニケリ。懸處ニ紀清兩黨ノ輩モ。我等力僅
ノ小勢ニテ此大勢ニ當ラニ事ハ。始終如何ト覺
候。先日當所ノ敵ヲ事故ナク追落シテ候ツルヲ
一面自ミシテ。御上洛候ヘカシト申セハ。諸人皆
此議ニ同シ。七月二十七日夜半許ニ。宇都宮天王
寺ヲ引テ上洛スレハ。翌日早且ニ。楠頓テ入替リ
夕リ。誠ニ宇都宮ト楠ト。相戰フテ勝負ヲ決セハ。
兩虎ニ龍ノ戰ト成テ。何レモ死ヲ共ニスヘシ。サ
レハ互ニ是ヲ思ヒケルニヤ。一度ハ楠引テ。謀ヲ

千里ノ外ニ運シ。一度ハ宇都宮退テ。名ヲ一戰ノ
後ニ失ハス。是皆智謀深ク。慮遠キ良將ナリシ故
ナリト。譽又人モ無リケリ。去程ニ楠兵衛正成ハ。
天王寺ニ打出テ。威猛ヲ逞スト云ヘトモ。民屋ニ
煩ヌモナサシテ。士卒ニ禮ヲ厚クシケル間。近
國ハ申ニ及ハス。遐壤遠境ノ人牧ニテモ。是ヲ聞
傳ヘテ。我モ我モト馳加リケル程ニ。其勢漸強大
ニシテ。今ハ京都ヨリモ。討手ヲ左右ナク下サレ
シ事ハ。叶ヒ難シトソ見ヘタリケル

參考本平記 卷六 十一

○増鏡云。大塔法親王。楠正成ナトハ。猶同心ニテ。世ヲ傾シ謀ヲノミ廻スヘシ。正成ハ金剛山千
 劔破ト云所ニ。イカメシキ城ヲコシラヘテ。又
 モ云ス猛者トモ。多ク籠リ居タリ。サテ大塔宮
 ノ令旨ナテ。國々ノ兵ヲ語ヒケレハ。世ニ恨ア
 ル者ナト。此彼ニカク口ヘハ。ミテオキカキリ
 ハ。東ヨリツトヒケリ。宮ニモ。附從ヒ聞ル者最
 多クナリユキケレハ。六波羅ニモ。東ニモ。最ヤ
 スカラヌ事ト。モテ騷キテ。猶彼千劔破ヲ攻攻類

スヘシト云ヘハ。兵ナト上リ重ルト聞ユ。正成
 ハ。聖徳太子ノ御墓ノ前ヲ。軍ノツノニシテ。出
 逢懸引。寄ツ返ツ。潮ノミチヒクコトクニテ。年
 ハ元弘ニタノクレニ暮果ヌ。云云年也
 正成披見天王寺。未来記事今五劫不食ノ
 元弘二年八月三日。楠兵衛正成住吉ニ參詣シ。神
 馬三匹コレヲ獻ス
 ○天正本云。八月三日。楠正成住吉ニ參詣シテ。神
 馬奉幣ヲ捧ケ。謹テ祈誓申ケルハ。當社ハ。是我

新編大平言 卷六

朝衛護ノ靈神トシテ。内ニハ菩薩ノ行ヲ祕シ。
 外ニハ神靈ノ名ヲ顯シ給フ。就中寶祚ヲ守ル
 ヲ以テ神慮トシ。武略ニ長スルヲ以テ靈感ト
 ス。故ニ異國ヲ降伏シ。異賊ヲ罰セラル、事。偏
 ニ是此神ノ助ニ依ル者ナリ。今正成不肖ノ身
 タリトイヘトモ。先朝ノ宸襟ヲ休メ奉ランタ
 メニ。逆徒征伐セン事ヲ祈ル。懇志ヲ照鑒シオ
 ハシテサハ。何ツ私ノカヲ費サント。誠ヲ致シ
 テ啓白シ。種々ノ禮奠ヲツ奉リケル云云
下同
 本文

翌日天王寺ニ詣テ。白鞍置タル馬。白輻輪。太刀鎧

毛利家。西源院。天正本。作白輻輪鎧。北條家。南都本。作白綾威鎧。並不載。太刀一領副テ引

進ラス。是ハ大般若經轉讀ノ御布施ナリ。啓白事

終テ。宿老ノ寺僧卷數ヲ捧テ来レリ。楠即對面シ

テ申ケルハ。正成不肖ノ身トシテ。此一大事ヲ思

立テ候事。涯分ヲ計サルニ似タリトイヘトモ。勅

命ノ輕カラサル禮義ヲ存スルニ依テ。身命ノ危

ヲ忘タリ。然ニ兩度ノ合戰。聊勝ニ乘テ。諸國ノ兵

招サルニ馳加レリ。是天ノ時ヲアタヘ。佛神擁護

卷六

ノ睥ヲ回ラサルカト覺候。誠ヤラン傳承レハ。上
 宮太子ノ當初百王治天ノ安危ヲ勘テ。日本一州
 ノ未來記ヲ書置セ給ヒテ候ナル。拜見モシ苦シ
 カラス候ハ。今ノ時ニ當リ候ハシ卷ハカリ。一
 見仕候ハヤト云ケレハ。宿老ノ寺僧答テ云。太子
 守屋ノモリヤ物部尾モノベ逆臣ヲ討テ。始テ此寺ヲ建テ。佛法
 ヲ弘メラレ候シ後。神代ヨリ始テ。持統天皇チツ皇女ミコノ
 御宇ニ至マテヲ。記サレタル書三十卷ヲハ
 先代舊事本記トテ。卜部宿禰ウラベノスグミ是ヲ相傳シ

干。有職ノ家ヲ立候。其外ニ又一卷ノ祕書ヲ留メ
 ラレテ候。是ハ持統天皇以來。末世代々ノ王業天
 下ノ治亂ヲ記サレテ候。是ヲハ輒ク人ノ披見ス
 ル事候ハ子トモ。別儀ヲ以テ。密ニ見參ニ入候ヘ
 シトテ。即チ祕府ノ銀鑰ヲ開テ。金軸ノ書一巻ヲ取
 出セリ。
 ○天正本云。太子自記サレテ候書。庫藏ニ納ラレ
 テ後。イマ夕披見ノ人承リ及ハストツ申ケル。
 正成ユレヲ聞テ。重テ申ケルハ。慮ニ代テ。朝

敵ヲ追伐ス大義ヲ思立候上ハ身不肖ナリト
 イヘトモ天地神明争カ衛護ノ手ヲ下サレテ
 候ヘキ若聖運時至スハヒカ潜ニ退テ命ヲ全フシ
 テ時ヲ待レトスト申ケレハ宿老寺僧此言ヲ
 感レテサラハ別儀ヲ以テ見參ニ入ヘシトテ
 金軸ノ書一卷ヲ取出ス云云
 正成悦テ則是ヲ披覽スルニ不思議ノ記文一段
 アリ其文云

當入主九十五代今川家毛利家北條家金勝院
西源院南都本作九十六代

既見第一卷 天下一亂而主不安此時東魚來吞四海

日没西天三百七十餘箇日西鳥來食東魚其後
 海内歸一三年如獼猴者掠天下三十餘年三十金勝

院西源院本作一上 天正本作五十年 大凶變歸一元云云

正成不思議ニ覺テ能ク思案シテ此文ヲ考ルニ
 先帝既人王ノ始ヨリ九十五代ニ當リ給ヘリ天
 下一度亂テ主安カラスナルハ是此時ナルヘ
 シ東魚來テ四海ヲ吞トハ逆臣相摸入道ノ一類
 ナルヘシ西鳥東魚ヲ食トアルハ關東ヲ滅ス人

アルヘシ。日西天ニ没ストハ。先帝隱岐國へ遷サ
 レサセ給フ事ナルヘシ。三百七十餘箇日トハ。明
 年ノ春ノ比天正本ニ作夏此君隱岐國ヨリ還幸成テ再
 帝位ニ即セ給フヘキ事ナルヘシト。文ノ心ヲ明
 ニ考ルニ。天下ノ反覆久シカラシト憑敷覺ケレ
 ハ。金作ノ太刀一振。此老僧ニアタヘテ。此書ヲハ
 本ノ祕府ニ納サセケリ天正本ニ云サレハ。正成ハ
 身ヲ全フシテ。聖運ヲ待
 一シトテ。赤坂ニハ兵ヲ置。我身ハ
 千劔破。城ニク櫛籠リケル。云云後ニ思ヒ合ス
 ルニ。正成力勤ヘタル所。更ニ一事モ違ハス。是誠

ニ大權聖者ノ末代ヲ鑒テ記シ置給ヒシ事ナレ
 トモ。文質ニ統ノ禮變。少モ違ハサリケルハ。不思
 議ナリシ識文ナリ

大塔宮賜赤松入道圓心令旨事

其比播磨國住人村上天皇醍醐帝皇第七御子具

平親王世稱後中書王六代ノ苗裔從三位季房力末孫季房

今川家。比條家。南都本作秀房非也。按赤松家譜以
 定房為具平親王六代孫。以季房為具平親王九代

孫。赤松次郎入道圓心トテ按圓心名則村。印本系
 圖以圓心為季房子。異

本系圖或作赤松茂則子凡予矢取テ無雙ノ勇士
 世系多異同。齟齬未敢一定

皇極經世一 卷六 三十一

アリ。元來其意豁如トシテ。人ノ下風ニ立ン事ヲ
 思ハサリケレハ。此時絶タルヲ繼廢タルヲ興シ
 テ。名ヲ顯ハシ忠ヲ抽ハヤト思ヒケルニ。此二三
 年大塔宮ニ附纏ヒ奉リテ
天正本云。則。祐。此。一。雨。年。京。都。ノ。訃。訟。ニ。退。一。屈。
シテ宮ニ附纏ヒ奉ル。云テ 吉野十津河ノ艱難ヲ經ケル圓心
 カ子息律師則祐令旨ヲ捧テ來レリ。披覽スルニ。
 不日ニ義兵ヲ舉。軍勢ヲ卒シ朝敵ヲ誅罰セシム
 へシ。其功アルニ於テハ。恩賞宜シク請ニ依ヘキ
 ノ由載ラレ。委細ノ事書十七箇條ノ恩裁ヲ添ラ

レタリ。條々何モ家ノ面目。世ノ所望スル事ナレ
 ハ。圓心斜ナラス悦テ。先當國佐用。莊苔繩山ニ城
 ヲ構テ。與カノ輩ヲ相招ク。其威漸ク近國ニ振ヒ
 ケレハ。國中ノ兵共馳聚テ。程ナク其勢一千餘騎
 ニ成ニケリ。一千。天正。本作七百 只秦代既ニ傾ニトセシ弊
 ニ乘テ。楚陳勝カ蒼頭ニシテ。大澤ニ起リシニ異
 ナラス。頓テ杉坂山里ニ箇所ニ關ヲ居。山陽山陰
 ノ兩道ヲ差塞ク。是ヨリ西國ノ道止テ。國々ノ勢
 上洛スル事ヲ得サリケリ。

參考太事記 卷六 三十二

關東大勢上洛 附 發向吉野赤坂金剛山事

去程二畿内西國ノ凶徒。日逐逐于蜂起スル由。六
 彼羅ヨリ早馬ヲ立テ。關東へ註進セラル。相摸入
 道大ニ驚テ。サラハ討手ヲ指遣ハセテ。相摸守
 ノ一族。其外東八箇國ノ中ニ。然ルへキ大名トモ
 ヲ催シ立テ。差上セラル。先一族ニハ。阿曾彈正少
 弼天正本。作遠江左近。大夫將監。治時下。餓之。治時。系圖。作時。治。遠江守宗時子也。詳見于此。下。後河右京。亮。註。名。越。遠。江。入。道。云。號。元。心。大佛前。陸奥守貞直。本文及諸異本第十卷云。大佛貞直戰死。錄倉而。令及第七卷云。貞直赴金剛山。第十一卷。金剛山。寄手

被誅段云。貞直被誅阿彌陀峯。貞直重死。兩所。甚。為。矛盾。按。北。條家譜。保曆間。記。攻。金剛山。後。被。誅。者。大佛陸奥右馬權助高直也。戰死。錄倉者。大佛陸奥守貞直也。由是見之。今載貞直者。蓋誤也。當作陸奥右馬權助高直。下。餓之。

同武藏左近將監天正本云。名。宣。政。 伊具右近太

夫將監右。北。條家。金勝院。西源院。南都。天正本。作左。而。天正本。云。名。有。政。 陸奥右馬

助天正本云。名家時。按。陸奥右馬助家時。式部丞。維。貞子。而。陸奥右馬權助高直。兄也。西源院本。作赤。橋右馬頭。金勝院本。載赤橋左馬頭家時。按。家時。即。陸奥右馬助也。然。金勝院本。兩。存。而。為。二。人。外。

樣ノ人々ニハ。千葉大助貞。 宇都宮參河守。小山判

官秀。 武田伊豆三郎。小笠原彦五郎。土岐伯耆入道

天正本云。號。存。孝。按。俗。名。賴貞。隱岐守。光定。子也。 葦名判官葦名。西源院本。作海老名。 三

浦若狹五郎北條家西源院南都天正本有千田太

郎城太宰大貳入道判官字按名氏明氏連子也

佐々木隱岐前司西源院南都天正本大貳作少

同備中守西源院本不載結城七郎左衛門尉按名親光上

小田常陸前司時知長崎四郎左衛門尉天正本無四

名高貞同九郎左衛門尉師宗長江彌六左衛門尉長江

家本作長沼金勝院西源院南都本作長沼駿河守長沼

長井北條家金勝院南都本彌作孫長沼駿河守長沼

毛利家本有長沼駿河守二人澁谷遠江守河越參河入道狩野七郎

圓工藤次郎左衛門高景毛利家西源院天正本不載

左衛門尉伊東常陸前司伊東金勝院本伊藤同大

和入道安藤藤内左衛門尉伊東金勝院本伊藤宇佐美

攝津前司二階堂出羽入道道蘊同下野判官名時元

同常陸介名宗元時弟也安保左衛門入道南部次郎西源

院本作南部山城四郎左衛門尉金勝院西源院本

甲斐入道勝院本又載南此等ヲ始トシテ宗徒ノ大名百三

十二人西源院本都合其勢三十萬七千五百餘騎

天正本作五十九月二十日鎌倉ヲ立テ天正本無

萬七千餘騎天正本八月八日先陣既ニ京都ニ著ハ後陣

日十月天正本十一月天正本

ハイマ夕足柄箱根ニ支ヘタリ

○天正本云。關東ヨリ大勢指上セ。角テ尚諸國七道ノ軍勢ニ。催促ノ御啟書ヲソ成レケル

大塔宮并捕兵衛正成誅伐事

所差上遠江左近大夫將監治時也。引率一族等來月二十日己前令進發。就治時催促可抽軍忠之狀。依仰執達如件

正慶元年十一月八日

天正本上云。十一月八日。關東先陣著京都云云。今又云。御啟書以十一月八日。諸國然則治時受關東之命。至京之後。填白下。

之乎。若為高時自鎌倉所下。則理當在東兵發鎌倉之時。

右馬權頭相摸守

トソ書レケル。コレニ依テ。河野九郎ハ。四國勢

ヲ打連テ。大船三百餘艘ニテ。尾崎ヨリ下京ニ

著云云下同

是ノミナラス河野九郎

北條家。金勝院。南都本。並作九郎左衛門尉。考河野家譜。通有子有九郎左衛門尉。通治。後改名通盛。任對馬守。按本文諸異本。勤王師者。亦有河野備後守通治。而屬高時。河野名亦本文諸異本。為通治。然則河野有二通治乎。凡河野家譜。世傳甚多。亦各有異同。無所折衷。因隨太平記諸本。所載姑并存異同。不敢考訂。

四國ノ勢ヲ率レテ

大船三百餘艘ニテ。尼崎ヨリアカリテ下京ニ著。

厚東入道。天正本載豐田參河守ヲ大内介安藝熊谷周防長門

ノ勢ヲ引具シテ。兵船二百餘艘ニテ。兵庫ヨリア

カリテ西京ニ著。今川家本云西宮ニ著甲斐信濃源氏天正本載

武田。小笠原一條。下條。逸見。村上。按是皆甲斐信濃源氏也。七千餘騎。中山道ヲ

經テ東山ニ著。江馬越前守。淡河右京亮。淡河今川家本。作澁

川。恐非也。右京亮。今川家。北條家。西源院。南都。天正

本。作近江守。金勝院本。作遠江守。按北條家譜。佐介

越後守時盛。子時治。號淡河右京進。北條家譜。有三時治。所謂阿曾。彈正少弼。左近大夫。將監。淡河右京

進也。北陸道七箇國ノ勢ヲ率シテ。三萬餘騎ニテ。三萬

今川家本。作三千。東坂本ヲ經テ上京ニ著。摠シテ諸國七

道ノ軍勢。我々我々ト馳上リケル間。京白河ノ家

々ニ居餘リ。醍醐。小栗栖。日野。勸修寺。嵯峨。仁和寺。

太秦邊。西山。北山。賀茂。北野。草堂。河崎。清水。六角堂

ノ門下。鐘樓ノ中ニテモ。軍勢ノ宿ラヌ所ハ無リ

ケリ。日本小國ナリトイヘトモ。是程ニ人ノ多力

リケリト。始テ驚ク計ナリ。天正本云。此大敵ヲ身

籠ル。正成一族二十餘人。相從共二百餘人云云。上

ノ段ニ云。正成七百餘騎云云。今作二百餘人。非也。去程二元弘三年。毛利家本。作二年。蓋非也。按元弘三年。即正慶二年也。正月

晦日

天正本。作正月二十八日。今川家。北條家。金勝院。西源院。南都本及神明鏡。作閏二月三日。而此。下赤坂城軍段。今川家。北條家。金勝院。南都本云。二月三日。赤坂城。矢合云。自相齟齬。蓋作閏二月者。非也。元弘日記。裏書云。元弘三年二月。治時赴金剛山云。第七卷諸本云。帝在隱岐時。富士名判官

密奏。曰。自二月初。關東勢圍金剛山云。由此考之。諸將發京者。正月晦日。而圍吉野赤坂。金剛山。三城者。為二月明矣。下當以此合考。

諸國ノ軍勢八十萬騎ヲ無八字 金勝院本。三手二分テ三手。毛利家。金勝院。天正本及神明鏡作四手。 吉野赤坂金剛山。三ノ城ヘツ向ラレケル。先吉野ヘハ。二階堂出羽入道道蘊ヲ大將トシテ。熊他ノ勢ヲ交ヘス。二萬七千餘騎ニテ金勝院本。無七千字。北條家。西源院。南都本。作二萬三千餘騎。 上

道下道中道ヨリ。三手ニ成テ相向フ。赤坂ヘハ。阿曾彈正少弼ヲ大將トシテ。其勢八萬餘騎。先天王寺住吉ニ陣ヲ張。金剛山ヘハ。陸奥右馬助搦手ノ大將トシテ。其勢二十萬騎。奈良路ヨリコソ向ハレケレ第七卷吉野城軍及千劍破城軍段云。赤坂大將金澤右馬助云。今云。阿曾彈正少弼赴赤坂。陸奥右馬助赴金剛山者。相齟齬諸本。說亦不同。因詳出下。

○今川家。北條家。南都本云。金剛山ヘハ。大佛陸奥守。同武藏左近將監。名越遠江守。追手ニ向フ。此下

今川家。陸奥右馬助。搦手ノ大將トシテ二十萬本不出

餘騎。奈良路ヨリ向フ。云云

○金勝院。西源院本云。赤坂へハ。赤橋右馬頭頭。金勝院

本。作助。或作頭。前後不大將トシテ。八萬餘騎。金剛山へハ。

阿曾彈正少弼二十萬餘騎。東條ヨリ追手ニ向

フ。大佛武藏將監。名越遠江守。伊具駿河將監。各

大將トシテ三十萬騎。内ノ郡ヨリ搦手ニ向フ。

下劔之。金剛山ノ城郭ヲ

○保曆間記云。元弘二年。大塔宮山々ヲ廻テ。義兵

ヲ舉。楠正成ト云者ヲ語フテ。金剛山ニ城郭ヲ

構テ。畿内近國ノ勢ヲ語フ。同三年春。此事ヲ聞

テ。關東ヨリ彈正少弼治時時。賴曾孫。遠江守。晴時。子。高時。養子。為子。櫻

北條家譜。作時治。為遠江守。宗時。子。既註。前陸奥右馬權助高直維貞子

遠江入道宗嚴法師朝時。孫。嚴時。子。彼等其外一族大將

軍トシテ。關東ニサルヘキ侍多分差上ス。其勢

五萬騎。彼城ヲ攻。云云

○元弘日記裏書云。元弘三年二月二十日。治時向

金剛山

○梅松論云。元弘二年。楠正成敵慮ヲ受テ。金剛山

二城郭ヲ構テ。錦ノ御旗ヲ上シカハ。去年笠置
へ向ヒシ東士等。重テ上洛シテ。吉野金剛山へ
向フ。云云

○神明鏡云。元弘三年閏二月三日。諸國ノ軍兵八
十萬騎ヲ四手ニ分テ。三ノ城ヲ攻ラル。吉野へ
ハ。道蘊二萬餘騎。赤坂へハ。阿曾時春八萬餘騎。
金剛山へハ。大佛陸奥右馬助貞宗貞宗當
作高真二十
萬騎。奈良路ヨリ向フ。長崎惡四郎左衛門尉高
貞侍大將ヲ承テ向フ。其勢十萬餘騎ナリ。云々

按攻赤坂金剛山諸將並人数
不同故今總出之ヲ以備參考

中ニモ長崎惡四郎左衛門尉ハ。別シテ侍大將ヲ
承テ。大手ニ向ヒケルカ。態己カ勢ノ程ヲ人ニ知
レントヤ思ヒケシ。一日引サカリテワ向ヒケル。
其行粧見物ノ目ヲソ驚シケル。先旗差。其次ニ逞
シキ馬ニ厚總懸テ。一様ノ鎧著タル兵八百餘騎。
二町許先タテハ。馬ヲ静メテ打セタリ。我身ハ。其
次ニ。纈纈ノ鎧直垂ニ。精好大口ヲ張セ。紫北條家
金勝院
西源院。南都。下濃ノ鎧ニ。白星ノ五枚兜ニ。八龍ヲ
天正本。作紺。

金ニテ打テツケタルヲ猪頭ニ著ナシ。銀ノ磨著
ノ臙當ニ。金作ノ太刀ニ振帶テ。一部黒トテ。五尺
三寸有ケル坂東一ノ名馬ニ。潮干瀉ノ捨小舟ヲ。
金貝ニ磨タル鞍ヲ置テ。秋冬色ノ厚總懸テ。三十
六差タル白磨銀筈ノ大中黒ノ矢ニ。本滋藤ノ弓
ノ真中握リテ。小路ヲ狭シト歩マセタリ。片小手
ニ腹當シテ。片小手。西源院 諸具足シタル中間。五
百餘人。五百。天正 二行ニ列ヲ引。馬ノ前後ニ從テ。
閑ニ路次ヲ歩ミケル。其後四五町引サカリテ。

思々ニ鎧タル兵十萬餘騎。咥ノ星ヲ輝カシ。鎧ノ
袖ヲ重テ。脊ノ子ヲ打タルガ如ク。道五六里カ程
支ヘタリ。其勢決然トシテ。天地ヲ響シ。山川ヲ動
ス計ナリ。此外外様ノ大名五千騎。五。西源院 三千
騎引分引分。晝夜十三日迄引モ切テツ向ヒケル。
我朝ハ申ニ及ハス。唐土。天竺。大元。南蠻モ。イマタ
是程ノ大軍ヲ發ス事有カタカリシ事ナリト。思
ハヌ人コソ無リケレ

赤坂城軍附 人見本間拔懸并 平野入道降參事

去程ニ赤坂城へ向ヒケル。大將阿曾、彈正少弼金勝

院西源院本。作赤後陣ノ勢ヲ待ツ口へシ力為ニ。

天王寺ニ兩日逗留有テ。同二月二日今川家北條

源院南都本。作二月三日。而。上段云。閏二月三日。諸大將發京相。齋。蓋上段誤也。可并見。午刻

ニ矢合有ヘシ。拔懸ノ輩ニ於テハ。罪科タルヘキ

ノ由ヲソ觸ラレケル。爰ニ武藏國住人ニ。人見四

郎入道恩阿ト按俗名光行彦云者アリ。此恩阿本

間九郎資貞ニ金勝院西源院本。作資頼。或作資貞。

網子也。村上向テ語りケルハ。御方ノ軍勢雲霞ノ

如クナレハ。敵陣ヲ攻落サン事疑ナシ。但事ノ様

ヲ案スルニ。關東天下ヲ治テ。權ヲ執ル事已ニ七

代ニ餘レリ。天道ハ盈ルヲ缺カク理ノ道ルハ。處ナシ。

其上上臣トシテ君ヲ流シ奉ル積惡。豈果シテ其身

ヲ滅サバ。ランヤ。某不肖ノ身ナリト云ヘトモ。武

恩ヲ蒙テ。齡ヨシ已ニ七旬ニ餘レリ。今日ヨリ後。差夕

ル思出モナキ身ノ。ツハ口ニ長生イキシテ。武運ノ傾

カンヲ見シモ。老後ノ恨。臨終ノ障カガトモ成ヌヘケ

レハ。明日ノ合戰ニ先懸シ。一番ニ討死シテ。其名

ヲ末代ニ遺サント存スルナリト語りケレハ。本
 間九郎。心中ニハ實モト思ヒ十カラ。今川家。毛利
 家。北條家。金
勝院。西源院。南都。天正本云。本間令度ハ。誰ニモ先
 ヲハ懸サセシモノヲト。思定ケレハ。云々下同
 枝葉ノ事ヲ宣フ者カナ。是程ナル打込ノ軍ニ。ソ
 ワロナル先懸シテ討死シタリトモ。差テ高名ト
 モ云レマシ。サレハ只某ハ人ナシニ振舞ヘキナ
 リト云ケレハ。人見ヨニモ無興氣ニテ。本堂ノ方
 へ行ケルヲ。本間怪ニ思ヒテ。入ヲ附テ見セケレ
 ハ。矢立取出シテ。石ノ鳥居ニ何事トハ知ス。一筆

書附テ。己カ宿ヘソ歸リケル。本間九郎。サレハコ
 ソ此者ニ。一定明日先懸セラレヌト心ユルニ無
 リケレハ。マタ宵ヨリ打立テ。唯一騎東條ヲ指テ
 向ケリ。石川河原ニテ夜ヲ明ス。朝霞ノ晴間ヨ
 リ。南ノ方ヲ見ケレハ。紺ノ唐綾威ノ鎧ニ。白母衣
 懸テ。鹿毛ナル馬ニ乗タル武者一騎。赤坂城ヘソ
 向ヒケル。何者ヤラシト馬打寄テ。是ヲ見レハ。人
 見四郎入道ナリケリ。人見本間ヲ見附テ云ケル
 ハ。昨夜宣ヒシ事ヲ。實ト思ヒナハ。孫程人人ニ出

參考太平記 卷六

三十三

拔レマシト打笑テワ。煩ニ馬ヲ早メケル。本間跡
 ニ附テ。今ハ互ニ先ヲ争ヒ申ニ及ハス。一所ニテ
 尸ヲ曝シ。冥途ニテモ同道申サシスルソヨト云
 ケレハ。人見申ニヤ及ブト返事レテ。跡ニナリ先
 ニナリ。物語レテ打ケルカ。赤坂城近ク成ケレハ。
 二人ノ者トモ。馬ノ鼻ヲ雙テ懸アカリ。塹ノ際ニ
 テ打寄テ。鎧踏張弓杖ツイテ。大音聲ヲ揚テ名乗
 ケルハ。武藏國住人。人見四郎入道恩阿。年積テ七
 十三天正本。作六十七。下。餓之。相摸國住人。本間九郎資貞。生年

三十七。鎌倉ヲ出シヨリ。軍ノ先陣ヲ懸テ。尸ヲ戰
 場ニ曝サシ事ヲ存シテ相向ヘリ。我ト思ハシ人
 々ハ出合テ。手ナミノ程ヲ御覽セヨト。聲々ニ呼
 ハリテ。城ヲ睨テ控ヘタリ。城中ノ者トモ是ヲ見
 テ。是ソトヨ坂東武者ノ風情トハ。只是熊谷平山
 カ一谷ノ先懸ヲ傳聞テ。羨敷思ヘル者トモナリ。
 跡ヲ見ルニ續ク武者モナシ。又サレテ大名トモ
 見ヘス。溢レ者ノ不敵武者ニ跳リ合テ。命ヲ失テ
 何カ也。只置テ事ノ様ヲ見ヨトテ。東西鳴ヲ靜

メテ。返事モセス。人見腹ヲ立テ。早且ヨリ向テ名
乗レトモ。城ヨリ矢ノ一ツヲモ射出サヌハ。臆病ノ
至リカ。敵ヲ侮ルカ。イテ其儀ナラハ。手柄ノ程ヲ
見セシトテ。馬ヨリ飛下テ。塹ノ上ナル細橋サラ
サラト走渡リ。二人ノ者トモ。出シ塹ノ脇ニ引傍
テ。木戸ヲ切落サシトシケル間。城中是ニ騷キテ。
土小間櫓ノ上ヨリ。雨ノ降カ如クニ射ケル矢。二
人ノ者トモカ鎧ニ蓑毛ノ如クニツ立タリケル。
本間モ。人見モ。元ヨリ討死セント思立タル事ナ

レハ。何カハ一足モ引ヘキ。命ヲ限ニ戰テ。二人ト
モニ一所ニテ討レケリ。是ニテ附從フテ最期ノ
十念勸メツル聖。二人カ首ヲ乞得テ。
二人ノ字。而云。乞得。本間。首。天王寺ニ持テ歸リ。本間カ子息源内
北條家。金勝院。南都本。無其衛資忠ニ。始ヨリノ有様ヲ語ル。資忠父カ首ヲ
一目見テ。一言ヲモ出サス。只候ニ咽テ居タリケ
ルカ。如何思ヒケシ。鎧ヲ肩ニ投懸。馬ニ鞍置テ。只
一人打出レトス。聖怪シニ思ヒテ。鎧ノ袖ヲ引留
メ。是ハソモ如何ナル事ニテ候ソ。御親父モ。此合

戰ニ先懸レテ。只名ヲ天下ノ人ニ知ラレシト計
 思召ハ。父子トモニ打連テコソ向ハセ給フヘケ
 レトモ。命ヲハ相摸殿ニ奉リ。恩賞ヲハ。子孫ノ榮
 花ニ貽サント思召ケル故ニマツ。人ヨリ先ニ討
 死ヲハシ給ラヌ。而ルニ思ヒ籠給ヘル所モナク
 又敵陣ニ懸入テ父子トモニ打死ニ給ヒナハ。誰
 カ其跡ヲ繼。誰カ其恩賞ヲ蒙ルヘキ。子孫無窮ニ
 榮ルヲ以テ。父祖ノ孝行ヲ顯ハス道トハ申ナリ。
 御悲歎ノ餘リニ。是非ナク死ヲ俱ニセント思召

ハ理ナレトモ。暫ク止ラセ給ヘト。堅ク制レケレ
 ハ。資忠涙ヲ抑ヘテ。カナク著タル鎧ヲ脱置タリ。
 聖サテハ制止ニ拘リヌト嬉レク思ヒテ。本間カ
 首ヲ小袖ニ裹ミ。葬禮ノ為ニ。側ナル野邊ヘ越ケ
 ル其間ニ。資忠今ハ止ムヘキ人ナケレハ。則打出
 テ。先上宮太子ノ御前ニ參リ。今生ノ榮耀ハ今日
 ヲ限りノ命ナレハ。析ル所ニ非ス。唯大悲ノ弘誓
 誠アラハ。父ニテ候者ノ討死仕リ候レ。戰場ノ同
 塔ノ下ニ埋レテ。九品安養ノ同墓ニ生ル。身ト

參考太平記 卷六

三十五

成也給へト泣々祈念ヲ疑シテ。涙トモニ立出
 ケリ。石ノ鳥居ヲ過ルト見レハ。我父ト俱ニ討
 死シケル。人見四郎入道カ書附タル歌アリ。是ソ
 誠ニ後世ニテノ物語ニ留ムヘキ事ヨト思ヒ
 ケレハ。右ノ小指ヲ斷切テ。其血ヲ以テ。一首ヲ側
 ニ書添テ。赤坂城ヘ向ヒケル城近ク成ヌル所
 ニテ。馬ヨリ下リ。弓ヲ脇ニ挟テ。城戸ヲ叩キ。城中
 ノ人々ニ申ヘキ事アリト呼リケリ。良暫アリテ
 兵二人北條家。金勝院。西源院。櫓ノ小間ヨリ顔ヲ
南都。天正本。作一人。

指出シテ。誰人ニテ御渡リ候ヤト問ケレハ。是ハ
 今朝此城ニ向テ。討死シテ候ツル。本間九郎資貞
 カ嫡子源内兵衛資忠ト申者ニテ候ナリ。人ノ親
 ノ子ヲ憶フ哀ヒ。心ノ闇ニ迷フ習ニテ候間トモ
 ニ討死セシ事ヲ悲テ。我ニシラセスレテ。只一人
 討死シケルニテ候。相伴フ者無テ。中有ノ途ニ迷
 フ覽サロソト思遣レ候ヘハ。同討死仕テナキ跡
 ナク。父ニ孝道ヲ盡シ候ハヤト存テ。只一騎相向
 テ候ナリ。城ノ大將ニ此由ヲ申サレ候テ。城戸ヲ

開カレ候へ。父カ打死ノ所ニテ。同ク命ヲ止メテ、
其望ヲ達シ候ハント。慇懃ニ事ヲ請_{コヒ}候ニ咽_ヒテソ
立タリケル。一ノ城戸ヲ堅_クメタル兵五十餘人、其
志孝行ニシテ相向フ處。ヤサレク哀ナルヲ感シ
テ。則_チ城戸ヲ開キ。逆_ニ戎木ヲ引ノケシカハ、資忠馬
ニ打騎リ、城中へ懸入テ。五十餘人ノ敵ト
本、作六。西源院 火ヲ散シテソ切合ケル。遂ニ父カ
本作五六十騎 討レシ跡ニテ。太刀ヲロニクハヘテ。覆_ツシニ倒レ
テ。貫_ツカレテコソ失ニケレ

金勝院本云。資忠慇懃ニ事ヲ請。候ニ咽_ヒテソ立
タリケル。城中ノ人々是ヲ聞テ。弓矢取身ノ哀_ミ
サヨ。敵ナカラモ剛_{カク}ノ者カナト感シテ。討_ツン事
ヲハ思ハス。資忠重テ申ケルハ。城戸ヲ開スト
モ。腹ヲ切ヘキナリ。同ハ城中ニ入テ。面々ニ見
參シテ死ナント思フナリ。一人ナリトモ。誠ニ
思切タル者ナレハ。コハサニ城戸ヲ開カヌカ。
云甲斐ナキ奴_{ヤブ}原_{ハラ}カナト。敵ニ腹ヲ立サセテ。城
戸ヲ開カセシト。態_{マテ}惡口ニ及ケリ。城中是ヲ感

レ。城戸ヲ開キ。逆茂木ヲ引スケレハ。資忠懸
入テ。五十餘人ノ敵ト。火ヲ散シテ戰ケルカ。深
手數多所ニ負ケレハ。父カ討レシ其跡ニテ。刀
ヲロニクハヘ。倒ニタラレ貫レテソ死ニケル。
其首ヲ取テ。城中ノ人々指集リテ。親子兄弟ノ
死タル様ニ。悲歎ノ淚ヲ流サヌ者ハ無リケリ
云云

惜カナ父ノ資貞ハ。無雙ノ弓矢取ニテ 金勝院。西源院。天正

本云。資貞ハ。テリ馬ノ達者ナリ云々 國ノ為ニ要須タリ。又子息資忠

ハ。タメシナキ忠孝ノ勇士ニテ。家ノ為ニ榮名アリ。人見ハ年老齡傾キヌレトモ。義ヲ知テ命ヲ思フ事。時ト共ニ消息ス。此三人同時ニ討死シヌト聞ヘケレハ。知ルモシラヌモオレナヘテ。歎カヌ人ハ無リケリ。既ニ先懸ノ兵トモ。ヌケヌケニ赤坂城ヘ向ヒ。討死スル由披露有ケレハ。大將則天王寺ヲ打立テ。馳向ヒケルカ。上宮太子ノ御前ニテ。馬ヨリ下。石ノ鳥居ヲ見給ヘハ。左ノ柱ニ花サカヌ老木ノ櫻朽ヌトモ。其名ハ昔ノ下ニ隠レシ

源氏物語 卷六 三十一

ト一首ノ歌ヲ書テ。其次ニ武藏國住人入見四郎
入道恩阿。生年七十三。正慶二年。今出川家本作建武二年。北條家南

都本作建武元年。金勝院西源院本作正慶元年。皆非也。二月二日。赤坂城へ向

テ。武恩ヲ報セシ。為ニ討死仕畢トソ書タリケル。

又右ノ柱ヲ見レハ。大...

間ニテシバシ。子ヲ思フ闇ニ迷ラシ。金勝院本云。迷

六ツノ街ノ道シルヘセン。三人同...

ト書テ。相摸國住人。本間九郎資貞。嫡子。源内兵衛

資忠。生年十八歳。正慶二年。金勝院西源院本作元年。北條家南都本作建

武元年。皆非也。仲春二日。父カ死骸ヲ枕ニシテ。同戰場ニ

命ヲ止メ畢トソ書タリケル。父子ノ恩義。君臣ノ

忠貞。此二首ノ歌ニ顯ハレテ。骨ハ化シテ。黄壤ニ

堆ノ下ニ朽ヌレト。名ハ留テ。青雲九夫ノ上ニ高

シ。サレハ今ニ至ルニテ。石碑ノ上ニ消殘レル三

十一字ヲ見ル人。感涙ヲ流サヌハ無リケリ。去程

ニ阿曾彈正少弼。金勝院西源院本作赤橋右馬助。八萬餘騎ノ勢

ヲ率シテ。赤坂へ押寄。城ノ四方ニ千餘町。雲霞ノ

如クニ取卷テ。先関ノ聲ヲワ揚タリケル。北條家西源院

西源院

南都天正本云三度其音山ヲ動シ地ヲ震フニ蒼
關ノ聲ヲ揚云々

崖モ忽ニ裂ツヘシ此城三方ハ岸高シテ屏風ヲ

立タルカ如シ南ノ方計コソ平地ニ繼テ塹ヲ廣

ク深ク掘切テ北條家金勝院西源院南都天岸ノ

額ニ塹ヲ塗其上ニ櫓ヲ搔並ヘタレハ如何ナル

大力早態ナリトモ輒ク攻ヘキ様ソナキサレト

モ寄手大勢ナレハ思侮テ楯ニハツレ矢面ニ進

テ塹ノ中ヘ走り下テ切岸ヲ上ラントシケル處

ヲ塹ノ中ヨリ究竟ノ射手トモ鏃ヲ支テ思ヲ様

ニ射ケル間軍ノ度毎ニ手負死人五百人六百人

西源院本作射出サレザル時ハ十カリケリ是ヲ

モ痛マス金勝院西源院十三日

テテ攻タリケルサレトモ城中少モ弱ラス見ヘ

ニケリ爰ニ播磨國住人吉河八郎ト云者大將ノ

前ニ來テ申ケルハ此城ノ體タラクカ攻ニシ候

ハ左右ナク落ヘカラス候楠此一兩年カ間和

泉河内ヲ管領シテ若干ノ兵糧ヲ取入テ候ナレ

ハ兵糧モ左右ナク盡候ニ情思案ヲ運シ候ニ

此城三方ハ谷深クシテ。地ニツ、カス。一方ハ平地ニテ。而モ山遠ク隔レリ。サレハ何クニ水アルヘキトモ見ヘヌニ。火矢ヲ射レハ。水彈ニテ打浦候。近來ハ雨ノ降事モ候ハヌニ。是程ニテ水ノ草散ニ候ハ。如何様南ノ山ノ奥ヨリ。地ノ底ニ樋ヲフセ。城中へ水ヲ懸入ルカト覺候。哀人夫ヲ集メテ。山ノ腰ヲ掘キラセテ御覽候ヘカシト申ケレハ。大將ケニモトテ。人夫ヲ集メ今川家。北條家。金勝院。西源院。南都。天正本云。人夫四千五百人ヲ集。云々城ヘツ、キタル山ノ尾ヲ一文

字ニ掘切テ見レハ。案ノ如ク土ノ底ニ丈餘リノ下ニ樋ヲ伏セテ。側ニ石ヲタ、三。上ニ眞木ノ瓦ヲウツフセテ。水ヲ十町餘ノ十町。毛利家本作二十町。外ヨリソ懸タリケル。此揚水ヲ止メラレテ後城中ニ水乏フシテ。軍勢口中ノ渴忍ヒ難ケレハ四五日カ程ハ。草葉ニヲケル朝ノ露ヲ嘗夜氣ニ潤ヘル地ニ身ヲ當テ。雨ヲ待ケレトモ雨降ス。寄手是ニ利ヲ得テ。隙ナク火矢ヲ射ケル間。大手ノ櫓ニツ今川家。北條家。南都。天正本。作六ヲハ燒落シヌ。城中ノ兵水ヲノ

今川家。北條家。南都。天正本。作六

日一二

テ十二日ニ成ケレハ十二日。西源院今ハ精力盡

ハテ、防ヘキ方便テタテモ無リケリ。死タル者ハ再ヒ

歸ル事ナシ。イサヤトテモ死ナンスル命ヲ各カ

ノイマタ落又先ニ打出テ。敵ト刺違ヘ思フ様ニ

討死セント。城ノ城戸ヲ開テ。同時ニ打出シトシ

ケルヲ。城ノ本人平野將監入道神明鏡云。正成使弟補五郎據赤坂

者。又「高櫓ヨリ走下リ袖ヲヒカヘテ云ケルハ

毛利家本云。平野高櫓ヨリ聲ヲ揚テ申ケル。下同本文暫ク粗忽ノ事ナ仕給

ヒソ。今ハ是程力盡喉乾テ疲レヌレハ。思フ敵ニ

相逢ニ事有難シ。名モナキ人ノ中間下部トモニ

虜ラレテ。耻ヲ曝サン事心憂ルヘシ。熟事ノ様ヲ

察スルニ。吉野金剛山城。イマタ相支テ勝負ヲ決

セズ。西國ノ亂イマタ静マラサルニ。今降人ニ成

テ出タラシ者ヲハ。人ニ見コラセシトテ。討事有

ヘカラスト存スルナリ。トテモ叶ハヌ我等ナレ

ハ。暫ク事ヲ謀テ降人ニ成今川家。北條家。金勝院。西源院。南都。天正本云。

平野申ケルハ。暫ク事ヲ謀テ降人ニ出。武家強ラ

ハ。忠ヲ致シ。御方強ラハ。元ノ如ク馳附

テ運ヲヒラクヘシ。人死テ再歸ラス。天下ノ事イマタ知ヘカラス。云々。下同本文。命ヲ全

參事大平言 卷六 四十二

フシテ。時至ラシ事ヲ待ヘシトイヘハ。諸卒皆此
 議ニ同シテ。其日ノ討死ヲハ止テケリ。去程ニ次
 日軍ノ最中ニ。平野入道高櫓ニ上リテ。大將ノ御
 方ヘ申ヘキ仔細候。暫ク合戦ヲ止テ聞召候ヘト
 云ケレハ。大將澁谷十郎ヲ以テ。事ノ様ヲ尋ルニ。
 平野木戸口ニ出合テ。楠和泉河内兩國ヲ平ケテ。
 威ヲ振ヒ候シ刻。一旦ノ難ヲ遁レシ為ニ。心ナラ
 ス御敵ニ属シテ候キ。此仔細京都ニ參シ候テ。申
 入候ハント仕候處ニ。已ニ大勢ヲ以テ押懸ラレ

申候間。弓矢取身ノ習ニテ候ヘハ。一矢仕リタル
 ニテ候。其罪科ヲタニ御免有ヘキニテ候ハハ。頸
 ヲ延テ降人ニ參ヘク候。若叶フマレキトノ御定
 ニテ候ハハ。カナシ一矢仕テ。尸ヲ陣中ニ曝スヘ
 キニテ候。此様ヲ具ニ申サレ候ヘト云ケレハ。大
 將今川家。西源院。南都。天正本。作兩。大將。按。上段云。
 赤坂。大將。阿曾。治時也。而第七卷。吉野城軍。千劍
 破城軍段。赤坂。大將。金澤右馬助云云。西源院。金勝
 院本上段云。赤坂。大將。赤橋右馬助云云。因此見之。
 今為兩大將者。蓋治時
 及右馬助兩人之謂乎。大ニ喜テ。本領安堵ノ御赦
 書ヲナシ。殊ニ功アラシ者ニハ。則恩賞ヲ申沙汰

スヘキ由返答シテ。合戦ヲソ止メケル。城中ニ籠
ル所ノ兵二百八十二人。明日死ナンスル命ヲモ
知ス。水ニ渴セル堪カタサニ皆降人ニ成テソ出
タリケル。長崎九郎左衛門尉是ヲ請取テ。先降人
ノ法ナレハトテ。物具太刀刀ヲ奪取。高手タカテ小手コテニ
イマシメテ。六波羅ヘソ渡シケル降人ノ輩如此ナ
ラバ。只討死スベカリケル者ヲト後悔スレドモ甲
斐ゾナキ。日ヲ經テ京都ニ著シカバ。六波羅ニイマシメ
置テ。合戦ノ事始ナレハ。軍神ニ祭テ。人ニ見コリ

サセヨトテ。六條河原ニ引出シ。一人モ残ラス者
ヲ別カケテ懸ラレケリ。是ヲ聞テコソ。吉野金剛山ニ
籠リタル兵トモ。彌獅子ノ齒ハカミヲシテ降人ニ出
シト思フ者ハ無リケリ
此下作者評ス六波羅斬降
人ヲ。西源院本等不載。今除
之。



参考太平記卷第六

参考太平記

参考

